

## 景観を考える

日本経済新聞は「プリズム現代」という特集のなかで、「景観を考える」というテーマを連載していた。3月30日付では、金沢市の景観問題を紹介していた。

金沢には17の景観に関する条例があるが、そこに4月さらに「沿道景観形成条例」が加わる。多くの条例が相互に補完し合いながら、今の魅力ある町並みをつくってきた。しかし、幹線道路沿いは、その大半が条例の対象区域外。派手な色彩の商業施設や飲食チェーン店、看板類が雑然と並ぶ統一感のない沿道風景が広がってきた。「全国どこにでもある風景でなく、金沢らしい沿道を取り戻したい」と18番目の条例制定となったという。

写真は現在住んでいる「賃貸住宅」の近くの風景である。住宅の一角に、売り上げ高1兆円と成長著しい某大型電器量販店がけばけばしい色で建っている。とにかく、よく目立つが、なんとも周囲の景観と相容れない。もうすこし「調和」の精神を働かせられないのであろうか。下の写真のように、団地の公園で遊ぶ子供たちが原色の色合いを見て育つことになり、大げさかもしれないが、将来が心配になってくる。



先の記事でも「レモンイエローの外観が特徴の電器量販店チェーンの郊外店も、ここでは白と緑」と述べている。景観施策は、歴史的、文化的に重要な特定地域に集中する傾向があった。金沢市では、「沿道や市街地など一般的な生活の場に広げることが、今後の課題になる」としている。名古屋市でも、ぜひ参考にしてもらいたいものだ。



(4月10日 記)